琉球大学学術リポジトリ

教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて ～歌唱における発声法や言葉の発音から探る　その１～

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2023-04-05 キーワード (Ja): 歌唱法, 指導法, 歌唱教材, 発声法, 発音 キーワード (En): 作成者: 持松, 朋世 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019700

教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて

～歌唱における発声法や言葉の発音から探る　その１～

持松　朋世[1]

To foster effective singing methods for university students aiming to become teachers

～ Explore the vocalization and pronunciation of words in singing　part１～

Tomoyo MOCHIMATSU [1]

要　約

本稿は幼稚園･保育士養成校での歌唱の講義、小･中･高の教員を目指す学生の歌唱や声楽の授業において、学生の効果的な歌唱法の醸成に向けた一考察である。個々が感じる歌いにくさの要因は様々である。本研究では教育者を目指す学生の歌唱指導を通して、発声法や言葉の発音の指導の実践例を挙げる。そして授業の中で学生が効果的な歌唱法を身に付け、今後指導者として活用させていく歌唱法の醸成に向けた取り組みや今後の課題について述べることとする。

キーワード：歌唱法、指導法、歌唱教材、発声法、発音

１．はじめに

１－１　研究動機

筆者は現在に至るまで、保育士や幼稚園教諭を目指す学生の歌の指導、小学校教諭を目指す学生の音楽指導（弾き歌いや器楽）、中学校・高校の音楽教諭を目指す学生の歌唱指導（声楽）、音楽学部の声楽専攻生の歌唱指導を行ってきた。それぞれの教育課程や学生個々の音楽体験などによって目標や内容は異なるものの、大学の授業では半期15回の授業の中で複数人を対象とする授業（15名～30名前後）から個人レッスンなど形態は様々であった。歌唱の指導法も同様であったが、授業の中で学生の様子や意見交換の場において発声や言葉の発音、リズムの捉え方などにおいて歌いにくさを感じていることが度々散見された。

そこで本研究では歌唱教材を中心に、筆者が各教育課程を履修する学生の歌唱指導に関する授業実践例を挙げて、歌いにくいと感じる要因について分析していく。将来教員を目指す学生がその歌いにくさに直面した場合、何が原因であるかを提示し、歌いにくさの解決に導きたいと考える。さらに演奏力や指導力に活かしていくために、発声法や言葉の発音を活かした歌唱法をいかに効果的に醸成していくことができるかについての考察を行っていく。

１－２　研究の目的

教育者を目指す学生には、歌唱において先ずは曲について理解し、正しく読譜して歌唱する力が必要であると考える。筆者は歌唱の授業を実践していく中で、言葉の発音や音程、リズムの取り方などに歌いにくさの要因の一つがあると考え、その解決策について様々な取り組みを行ってきた。今回はそれぞれの教育課程の授業の中で取り上げてきた曲の中から、発声法や発音の面における指導内容に注目していく。さらに学生への指導内容から導き出された歌いにくさについてその要因を抽出して具体的な解決策を図るなど深化させ、学

[1] 琉球大学教育学部音楽教育専修所属

生自身が歌唱法の醸成を行い教育現場で活かすことを目的とする。

1－3　研究の方法について

歌唱に関する研究では、発声法、発音、演奏解釈など多くの先行研究がなされている。

本研究では教育者を目指す学生の歌唱指導を通して、発声法や正しい言葉の発音から得た気付きを挙げ、限られた授業時間の中で学生が効果的な歌唱法を身に付け、応用させていけるように歌唱法において留意すべき点や工夫について述べていく。そのために、先ずそれぞれの教育課程における歌唱の実態や指導内容について概観していく。次にそれぞれの課程で取り上げている《とんぼのめがね》《うみ》《赤とんぼ》《椰子の実》の指導法について例示していく。また演奏家としての経験からも、歌いにくさの要因と解決方法についても考察していく。さらに今後は筆者自身の演奏実践を通して得た気付きも併せて、学生に対する歌唱指導から導き出された成果と課題を、更なる研究テーマとして取り上げていきたいと考えている。

2．歌唱の指導について

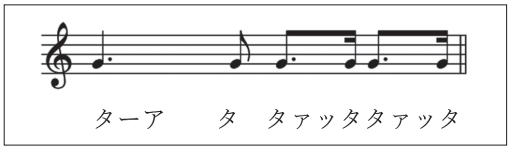
ここでは各課程での現状の取り組みについて述べることとする。ここ数年は感染症対策としてWebの活用を行った。歌唱は声を発する授業であるため、文部科学省のガイドライン[1]による感染症対策を講じながら歌唱活動を実施した。対面授業が可能となった現在でも効果のあった部分は継続して活かしていきたいと考える（本稿にも一部分を挙げている）。

2－1　保育士・幼稚園教諭の養成校での声楽の授業

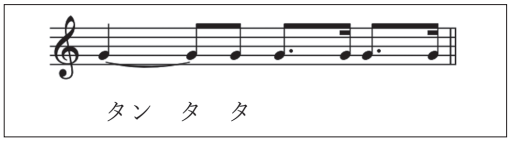
養成校の授業では保育士・幼稚園教諭を目指す学生が、歌唱の技術である正しい発音、正しい音程、正しいリズムで歌唱できるようになることを、ねらいの一つとしている。さらに歌詞解釈や曲の理解、既習曲を活かした読譜力の育成も目標の一つとしてはいるものの、授業を集団で行っているために個々が抱えるすべての課題に向き合うことは困難である。しかしオンラインでの授業で動画や音声の提出などを課すことで、学生個々人の課題が抽出されるため、その解決に向けての細やかな指導が可能となった。再度、完全に対面の授業に戻った際には効果的な指導法をより深化させていきたいと模索しているところである。

歌唱において課題を感じた要因の一つには「何となく歌っていた」「耳コピで歌っていた」という学生からの声である。その中から下記は読譜におけるリズムの取り方による歌いにくさを例に挙げることとする。「子どもの歌」の中で度々目にするリズムでもあり、曖昧な記憶による歌唱として授業の中で取り上げたため、次に一例として挙げる。

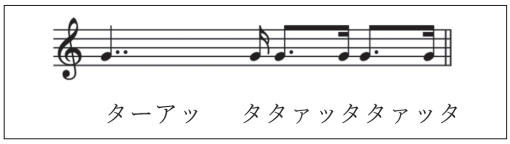
譜例①



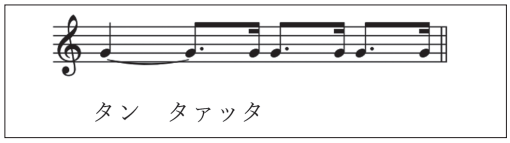
譜例①’



譜例②



譜例②’



1：学生に譜例①と②のリズムの違いがあることに気付かせるため、筆者が歌詞を付けて両方を歌う。

2：付点八分音符で伸びている音の歌詞を伸ばす意識を持たせるために、学生に譜例①と②をリズムで歌わせる。

3：学生に四分音符で足踏みをさせながら、メロディーライン（譜例①と②）のリズムの手拍子をさせる。

４：学生に歌詞を付けて譜例①と②の両方を歌わせ、違いに気付かせる。その際には譜例①’や②’も確認させて、音の長さの違いを理解させる。

これらのことから、学生は何気なく歌っていた箇所に対して、正しく楽譜を見て歌うことの大切さに気付いた、などといった学びに繋がった様子であった。一方で、違いに気付けない、周りに合わせてできたつもりになっているという学生も、提出課題や実技の試験において明らかであった。このように学生個々の演奏から、理解度に差があることが認められた。学生の中には教員からの指摘を受けて理解しようとする姿や、子どもたちの前で正しく歌い伝えていくことができることを目指したいという明確な目標を持つ姿も窺えた。

なお「表現」の指導内容としては、保育所保育指針（厚生労働省：2017）や幼稚園教育要領（文部科学省：2017a）には次のようにある。

「保育所保育指針（３歳以上児）　表現の内容：⑥音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
幼稚園教育要領　表現の内容：⑹音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」

いずれも下線部分に注目すると、音楽に親しむ、歌を歌う楽しさを味わう、と示されている。さらに当該箇所に関して幼稚園教育要領の解説（文部科学省：2017b）には次のような記載がある。

「正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく，幼児自らが音や音楽で十分遊び，表現する楽しさを味わうことである。そのためには，教師がこのような幼児の音楽に関わる活動を受け止め，認めることが大切である。また，必要に応じて様々な歌や曲が聴ける場，簡単な楽器が自由に使える場などを設けて，音楽に親しみ楽しめるような環境を工夫することが大切である。そもそもの歌を歌う楽しみを味わう活動を行っていくために、指導者が楽しく子どもたちが音楽に触れていくための工夫が求められる。」

これらの内容から、子どもたちが楽しいと思える活動に繋げていくために、教育者となる学生にはどのような力を、どのようにして身に付けるのかを考察していく必要があると思われるが、先ずは学生自身が音楽の諸活動を心から楽しいと感じることが大切であると考える。さらに音楽を楽しむだけではなく、正しく歌うこと、そして歌唱指導を行うことを考えたとき、歌唱法、言葉の発音、様々な表現方法のための楽曲分析や歌詞解釈、曲の背景の理解などの読譜力は必要であると思われる。

筆者が担当したクラスの実技試験では暗譜の歌唱もあったため、歌詞を覚えることに注力していた様子であったが、マスク越しでも楽しく歌に臨む姿が見られた。発音は授業時の指導を受けて明瞭になっている部分や表現の工夫の見られる演奏もあり、今後も更なる学びの効果に期待したい。音域に関しては試験時にピアノを用いたため、個々の音域に合わせて調整をして実施したが、本件については課題が残り、今後の研究としていきたい。

音程が取れないことによって歌が苦手、楽しくない、と感じる学生はこれまでも散見された。このような学生の苦手意識や心理的側面への配慮もしながら、集団での指導の中から個々に合う適切な解決策を検討していく必要があると考える。実際に学生の中には歌が苦手であったが楽しく歌う活動に臨めたという声もあったため、学生自身が今後も楽しく歌に向き合っていくための歌唱法の醸成に向けた指導法を探究していきたい。

２－２　小学校課程「音楽」での授業

小学校教員を目指す学生の音楽の指導として弾き歌いや器楽（ソプラノリコーダー）、音楽の基礎知識の指導などを行っている。ピアノ経験や読譜力の有無、歌唱の技能の有無や得意・不得意などあるが、特に声を出すことに関しては学生は様々な課題と向き合っている。授業の中では、教員を目指す学生自身が音楽に興味関心を持つための工夫をも行いながら、知識や技能の習得を目指している。具体的には読譜や演奏に必要な音楽の

基礎知識や、ピアノやソプラノリコーダーの技能の習得、共通教材の歌唱曲の歌唱や、歌唱教材の弾き歌いに必要な伴奏付けも学生個々のレベルに応じて指導を行っている。その中で前掲の２-１同様に学生のリズムに対する捉え方の曖昧さも見られた一方で、歌唱においても歌詞の発音、音域や音程などによる歌いにくさも窺えた。

なお小学校学習指導要領音楽の歌唱の技能における「内容」（文部科学省：2017c）には次のようにある。（表現⑴ウ㈠より一部抜粋）

第１・２学年：「自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能」
第３・４学年：「呼吸及び発音の仕方に気を付けて，自然で無理のない歌い方で歌う技能」
第５・６学年：「呼吸及び発音の仕方に気を付けて，自然で無理のない，響きのある歌い方で歌う技能」

また前掲の小学校学習指導要領音楽の「指導計画の作成と内容の取扱い」（前掲：2017c）においては、変声期について次のようにある。

「変声以前から自分の声の特徴に関心をもたせるとともに，変声期の児童に対して適切に配慮すること。」

「音楽」の授業では、歌唱に限らず小学校教員に必要な音楽の基礎を歌唱・器楽・理論の各活動を通して総合的に学ぶ内容である。これらを踏まえた上で、授業で取り上げた歌唱指導の中での気付きや課題を、学生の指導において効果的な歌唱法の醸成に繋げられるよう工夫していきたいと考える。歌唱については教科書の中で各学年の発声指導のポイントも示されており、特に高学年では前掲のような変声期についての記載もある。教員を目指す学生は歌唱に必要な発声法や言葉の発音の仕方、変声期という声と身体の仕組みについても認識しておく必要があると思われる。

２－３　音楽専攻生・音楽教育専修生の歌唱

声楽の授業において、コンコーネやイタリア歌曲を用いた歌唱、教科書掲載曲（共通教材を中心に）や日本歌曲に取り組む中で、発声や言葉の発音をはじめ、曲の背景や歌詞解釈など曲についての理解を深めている。

なお中学校の学習指導要領音楽（文部科学省：2017d）の「指導計画の作成と内容の取扱い」においては次のようにある。

「我が国で長く歌われ親しまれている歌曲のうち，我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるもの。」

授業では先ず自分自身の声と向き合う発声練習を行っている。歌唱指導の際には教師の範唱が求められる。そのために筆者は学生に、口の開け方、舌や唇、口角、表情、視先などの意識を持たせて、発声練習を効果的に活用して歌唱へと繋げる流れを大切にしている。外国の歌と日本の歌の発音の違いなども挙げつつ、学習指導要領にもある「日本語のもつ美しさを味わえるもの」をどのようにしたら歌唱表現できるのか、また指導書にある言葉の発音の留意点などにも着目して、どのようにしたら正しい発音や発声法に近付けるのかなどの課題を学生個々が持てるように、歌唱指導を実施している。さらに様々な発声法を提示して、目指したい声がどのようにしたら出せるのか、そのために何をすべきか、学生とディスカッションをしながら歌唱実践に取り組んでいる。

２－４　発声練習について

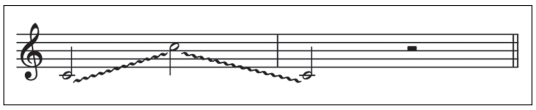
発声練習は声を出すためのストレッチであり、また自身の声と向き合う事でもあると考える。ただコロナ禍において特に集団での歌唱の授業ではマスクを外して歌唱することが困難であったため、対面での授業ではWeb[2]も活用した。しかし発声練習の視聴率は低く、この効果は不明である。そのため対面の授業では声を出すことだけではなく、身体を動かしてリラックスする時間を設けたり、声の出し方の確認を行うなどWebの内容を補うなどした。またレポート課題で子どもたちと楽しく取り組める発声練習について考察し、授業時に内容を共有するなども行った。

ここで声の区分について述べる。斉田（2016, pp.126-127）によると「一般的なものは地声と裏声である」と言われており、また声帯の振動様式からの分類では、さらに４つの区分に分かれるとある。また大賀（2003, p.67）によると、「人間の声には個人差があるものの３つの異なった声区があり、それぞれ低声区・中声区・高声区と区別され、声区の境に「パッサッジョ」と呼ばれる通過点があります。パッサッジョをなめらかに移行する技術により、ベルカント発声では低音から高音までをむらのない統一した美しい響きにすることを求めます」と論じられている。声区の変換部分では声量が落ちる、音階の上下行で変換部分が異なることもあるため声が不安定になる、地声のまま音域を上げていくと高音が出し辛くなる、という歌いにくさに直面することになる。また変換がうまくいかないために変換する部分で声が出し辛い、音が上がらないなどという学生も見られた。

ここで筆者自身も実践しており、いくつか学生の指導で効果のあった発声法について提案してくこととする。

⑴　１オクターブ（グリッサンドを用いる）の練習（譜例③参照）

譜例③



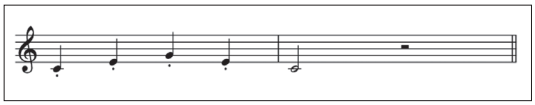
ａ母音で歌唱したが、声を出すだけではなく、手を動かすことで口の開け方のイメージや息の流れを視覚化した。さらに重心を足先から踵に移すことで、腹筋や背筋の意識を持たせた。歌う際には次の点を伝えている。

・口の中は、うがいをするように、あくびをするように、「ハア」と温かい息を手に当てるように開けること。
・下半身の意識を持たせるが、特に足の裏で地面をしっかりと踏みしめること。ただし身体に負荷がかかることもあるため無理をしないこと。
・手を使って息の流れのイメージを持つこと。また手を動かしながらも下腹部に身体の軸を感じ、筋力の意識を持つこと。

このように音域を拡大させた練習により、響きの統一感や変換点の確認、正しい音程での歌唱を目指した。コロナ禍前のマスク無しの歌唱では音域の広がりや口の開け方、正しい音程の確保など効果が見られたが、コロナ禍ではマスク着用であったため、口の開け方や表情の指導が困難であった。

⑵　スタッカートでの練習（譜例④参照）

譜例④



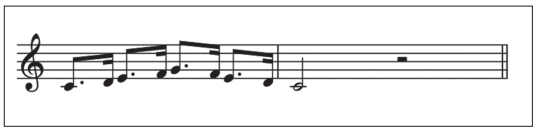
言葉はａ母音や、舌の中央奥部分が軟口蓋に付くkaや、鼻濁音に繋がるngaでの練習を行った。これは舌の動きや鼻腔の意識付けを目的として行ったが、同時に音程の意識を持たせるために、視覚化や動作も伴って実施した。この練習では次の３つの段階を示した。

①音の動きを見て手で音を示す（手を上下に動かす、音が高いほど手を上げる）
②息の量や息の速さを考えて身体の準備をする
③息を使って声を出す

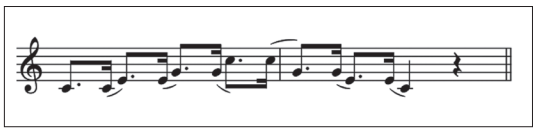
また発声指導の中では、「ボールを遠くに飛ばすように」「遠くに向かって」と例えられることもあることから、実際にボールを投げる真似をしてみたり、跳躍するなどの身体運動を伴いながら発声を試みた。その効果として音程にとらわれずに声が出やすくなった、などの声もあった。

⑶　唇や舌の動きを意識した練習（譜例⑤、⑥参照）

譜例⑤



譜例⑥



いずれも唇や舌の動きに加えて、スキップなどの身体運動を伴いながら行った。言葉はlaやwaで行うことによって、舌や唇を動かす意識付けを行った。スキップなどの身体運動を取り入れることで、近くにいる学生同士で楽しみながら発声練習に取り組む姿が見られた。声を出すことは身体も心もリラックスした状態が望ましいと考えるが、それぞれに効果があったと思われる。また音の進行に併せてスキップをしたり、歩きながら歌うなど変化を持たせていくことで、息のコントロールや重心の意識にも繋がり、楽しく声が出るようになった、思わず高い声が出た、という声もあった。

⑷　季節の曲を用いた練習

季節に合った既習曲などを用いて、調性を上げていきながら発声練習を行った。歌詞を付けると楽譜を見るなどして視線が下がるため、ａ母音やla、aeaeを使って、顔の向きや視線、口の開け方などを意識させた。季節の曲は長くても８小節程度のフレーズで区切り、半音ずつ上げていきながら少し高い音域まで上げ、最後は教科書の調性で歌った。既習曲でもあるため雰囲気が緩み、和やかな歌唱になり、歌いにくかった跳躍部分や、個々が苦手とする音域において、徐々に「歌いにくさ」から「歌いやすさ」へ変化していったのではないかと思われる。

⑴から⑷までは、筆者が実践して効果の見られた発声練習の一部を紹介した。感染症対策としてマスク着用で歌うことによる、言葉の不明瞭さ、表情の不明さ、口の開け方の確認不足による指導の困難さなどの課題は残っている。しかしWebの活用によって15回の授業を経て歌うことへの意識付けや歌いづらさの改善が多少なされている様子が、音声提出や動画提出で確認できたことは大きく、今後対面の授業でも活用していきたいと考えている。また発声指導に関しては成果を感じつつ、今後も学生個々が抱える課題と向き合っていきたいと考える。

３．歌唱実践における気付きと課題について

ここからは授業で取り上げた曲を例に挙げ、発音と発声法、歌唱指導の実践内容から、歌唱指導における気付きと課題を挙げていくこととする。

３－１　保育士・幼稚園教諭養成校での実践

《とんぼのめがね》額賀誠志作詞／平井康三郎作曲（小林：2019, p.116）を取り上げる。

以前、筆者がこの曲を演奏（幼稚園児対象）した際、子どもたちは自発的に手を広げるなど楽しく歌っていた様子が深く印象に残っている。

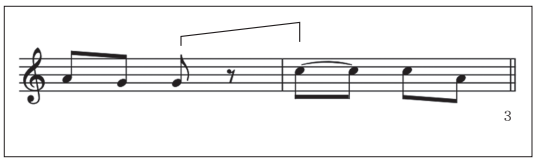
使用したテキスト（前掲）はハ長調で、音域は１オクターブである。曲は最低音の一点ハ音から始まり、全体的に順次や３度音程を伴いながら進行する。中間部分に向けて音が上行し、中間部分と後半部分に一点ト音からこの曲の最高音の二点ハ音へ４度の跳躍進行が２か所ある。米山（2007, pp.88-89）では５歳児の平均値をイ音から二点ハ音の10度の音域としている。また年齢と声域の変化において成人男性も同様の二点ハ音の最高音が平均値とある。個々によって声域は様々ではあるものの、学生の歌唱の様子からも一点ト音から最高音の二点ハ音への跳躍では歌いにくさを感じている姿が見られた。

３－１－１　発音と歌唱法の指導例

言葉の発音や発声法にも注目した歌唱法の指導例について、次の６点を挙げる。

⑴　譜例⑦の部分では一点ト音から二点ハ音を目指して出す際に、ボールを遠くに飛ばすなどに例えて、動作を伴いながら歌唱を試みた。最初は戸惑いがみられたが、次第に身体を動かしながら歌うことに慣れ、声の出し方のイメージに

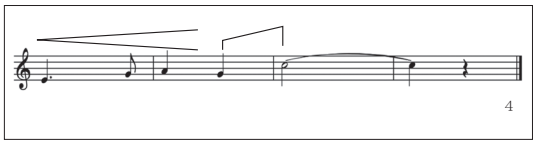
譜例⑦



繋げて歌うことができていったように思われる。さらに二点ハ音が数回続く部分では、音が高く歌いにくさも感じている様子が見られたため、徐々に音が高くなるイメージを持たせている。次に少しずつ手を上げていくなどの身体を使った歌唱を試している。

⑵　譜例⑧の部分では一点ト音から二点ハ音の跳躍で歌いにくさから、途中で息継ぎをする様子が多く見られた。ここでは「とんだから」という歌詞の内容が、「とんだか／ら」と息継ぎが入ることで文法上、意味や機能を持った最小の言葉の単語が途中で切れてしまう。さらに「ら」の言葉の発音が強調されてしまうことで、言葉の意味が伝わらない歌唱になってしまう。そのためこれらのことに留意して、ブレスコントロールや身体を動かすなどしながら歌唱を試みている。

譜例⑧



⑶　また譜例⑧の部分では、歌詞の抑揚と音の動きが逆転する部分でもある。授業の実際では、この曲で歌詞の抑揚の指導までには至らなかった。この部分にはクレシェンドの記号もあることから、今後はなぜそのような音の動きになっているのかという楽曲分析や歌詞解釈の側面にも着目していきたい。さらに「こういう思いを持って」などといった意見を発声面でも応用させてみたいと考える。

⑷　発音の面では「とんぼ」「とんだ」の撥音の違いで迷いが見られた。「とんぼ」の「ん」は口を閉じた発音、「とんだ」は口を開けて歯の裏に舌先を付けた発音であると、両者が異なることを伝えている。歌詞読みの際は正しく発音ができているため、それを歌唱に繋げていけるようにしたい。

⑸　「めがね」の「が」は鼻濁音であるが、ガ行の濁音については、濁音と鼻濁音についての説明を行っている。

⑹　「あおいおそら」の「あおい」は母音が連続して発せられ、aoiと口の形が変化する部分である。今はマスクをして歌唱をしているために口元の確認ができないが、「あ」で口を開いて「お」で唇をすぼめ、「い」で口を緩めるなど明瞭に発音するように伝えている。子どもの歌の中には「ひとつ、ふたつ、みっつ」と数を数えていく歌や、「あお、あか、みどり、しろ、きいろ」など色を表す言葉、また擬音語や擬態語などが多く含まれている。発音を明瞭にするためにも、口の動きなどに注目させている。

3－1－2　学生の歌唱から得た気付きや課題

ここで学生の歌唱から得られた気付きと課題を以下に示す。

⑴　一点ト音から二点ハ音の跳躍部分で声区の変換が生じるため、学生の一部は変換区で難しさを感じているようであった。授業では発声練習で挙げた練習を取り入れるなどして、声区変換について学生自身が気付きを得られるようにしたが、発声練習の応用には課題を感じた。

⑵　3-1-1⑴で挙げた部分では前述の通り、声の出し方のイメージを持って歌うことや実際に身体を動かすことによる歌いやすさに気付いたようであった。学生からは「身体を動かすとイメージを持ちやすい」という声があったが、それが他の曲でも応用されるかは不明である。

⑶　3-1-1⑵や⑶で挙げた部分では、手や身体を動かしながら歌うことで歌いにくさは一時的には解消されたが、継続には至らなかった。また一点ト音の「か」の発音の時に「息を使って」という指示を出したが、歌唱の際の息の使い方への理解が十分でないため、発声法については課題が残った。さらに跳躍のある曲ではグリッサンドを用いた発声練習を取り入れてはみたものの、発声練習との繋がりは前述同様に課題である。

⑷　「ん」の撥音は、今まで意識していなかった学生が多くみられ、混乱が生じていた。歌詞を読んだ際と歌唱した際の口の開閉を確認させたが、無意識に行っていることもあり、正確な発音の習得についても今後の課題である。

3－2　保育士・幼稚園教諭養成校、小学校「音楽」での実践

《うみ》文部省唱歌／林柳波作詞／井上武士作曲（小原ほか：2021a, pp.28-29）を取り上げる。

本楽曲は小学校第１学年の歌唱の共通教材である。昭和16年に国民学校初等科第１学年の教科書に掲載された。（歌詞の第３節の「うかばせて」は昭和55年以降この歌詞が用いられているが、当初は「ウカバシテ」であった。）筆者は保育士・幼稚園教諭養成校、小学校「音楽」の授業でこの曲を取り上げた。

3－2－1　発音と歌唱法について

小学校第１学年の教科書には学習目標として「うみの ようすを おもいうかべながら うたいましょう」（前掲：2021a, pp.28-29）とあり、活動のヒントとして「「いいな」と おもう うたいかたを している ともだちが いたら，まねて みよう」（前掲：2021a, pp.28-29）と歌い方についての記載もある。また教科書には数ページ前に声の出し方「うたごえ」として、「くちの なかを よく あけて，ひとつひとつの ことばを はっきり うたいましょう。」（前掲：2021a, p.19）とある。指導書には指導のポイントとして「「口の中をよく開けて」と言っても，子供たちはなかなか理解しにくい。指導者がよい歌い方とよくない歌い方の見本を示して，子供たちが自分で考えられるようにする。そのうえで，言葉の発音や笑顔の表情も大切であることを伝えたい。」（小原ほか：2020, pp.22-23）と示している。子どもたちにもわかりやすく表情や口の開け方を示しているが、指導者に対して「よい歌い方とよくない歌い方の見本を示して」とあることから、口の開け方、表情、発声、明瞭な発音による歌唱法などを身に付けるだけではなく、様々な例を提示できるような歌い方の習得も必要であると考える。

そこで言葉の発音や発声法に注目した歌唱法の指導例について、次の７点を挙げる。

⑴　「うみ」の言葉は１番から３番まで冒頭部分に出てくるが、この「う」は口の中を開いて深く発音するｕの発音である。小学校第１学年の教科書では一点ロ音から開始するため、息を流すことを心掛けるとその後の下行していく音楽にも大きなフレーズ感が生まれ、丁寧に歌うことができる。

⑵　「ひろいな」の「ひ」は、「語頭のヒはçを用い、ドイツ語のichに似た鋭い発音である」（藍川：1998, p.133）とあるように、口を横に狭くする発音にならないように注意したい。これはその後の「ひがしずむ」の「ひ」も同様である。

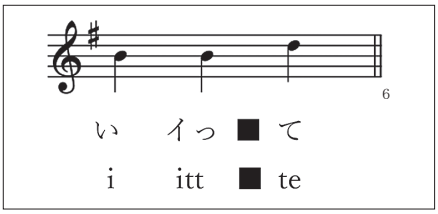
⑶　「つきが」「ひがしずむ」この場合の「が」は鼻濁音を用いる。日本語の美しい響きを残していくためにも、鼻濁音を意識する必要がある。ここでは優しく柔らかく発音することを心掛けることで、鼻濁音の発音に繋がると考えられる。

⑷　「しずむ」の「し」の発音は、訓令式で書くとsiであるが、ヘボン式ではshiになる。「国語に関する世論調査」[5]によると、標識などでも目にするヘボン式がよく用いられているとのことである。歌唱の際には発音が浅くなる傾向にあるため、ｓで息を流しながらｉの母音へと向かう意識を持ちたい。

⑸　「あおい」の部分は、３-１-１⑹で述べているように、歌唱の際には口や唇を使って、言葉の響きの変化を持ちたい。

⑹　「いって」の部分では次の楽譜（譜例⑨参照）のように、前の母音を延ばして促音の特徴である間（■で示した部分）を持って発音したい。

譜例⑨



⑺　この曲は開始音が一点ロ音から始まり、４小節目でクレシェンドからフォルテで二点二音の高音へと向かっていき、その後フレーズが終わると同時にメゾフォルテで落ち着く。二点二音は少し高い音域にはなるが、クレシェンドの際に息の流れや距離感を具体的に提示すると声の目標が明確になり、歌いにくさが解消されるのではないかと考える。

3－2－2　学生の歌唱から得た気付きや課題

⑴　歌唱において歌詞の朗読は可能な限り行ったが、その際に口を動かすことに意識を持たせた。それによって例えば国語教育専修の学生であれば発音の仕方に着目したり、保育士・幼稚園教諭養成課程の学生であれば表情などに気付きを持ったようであった。今後は範唱CDやデジタル教材の活用なども考えられるが、状況に応じて教員の範唱や朗読が必要になることも伝えている。

⑵　学習指導要領には技能面での内容に注目すると「自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能」「互いの歌声や伴奏を聴いて，声を合わせて歌う技能」（文部科学省：2017d）等の事項が取り上げられている。教科書には２小節毎にブレスの指示や休符があるが、大きなフレーズで考えると４小節を一つのまとまりとして捉えることが望ましいと考える。また身体を左右に揺らしながら歌ったり、拍子に合わせて手で円を描きながら歌ってみたが、音が上行すると大きく円を描くことで息の使い方にも留意して歌唱してみるなど、高音やクレシェンドへの移行もスムーズに行えるようになった。

⑶　現在はマスクを着用した状態での歌唱で、明るい表情や口を開けることの確認が不十分になるため、表情の明暗や口の開閉の比較演奏を教員が提示して、どのように違うのか学生に具体的に確認させている。３-２-１⑴の「う」の発音や、同⑸の「あおい」などの比較を共に行ってみると、その違いは明らかであった。目指したい歌い方だけではなく、この部分をどのように変えたら変わるのか、それぞれが具体的に比較したり違いを理解できるようにしている。現在は筆者が示しているが、学生同士がディスカッションを通して技能の習得方法などを互いに共有できるようにすることが課題である。

⑷　鼻濁音の発音、語頭の発音の明瞭さは、引き続き課題である。前述の通り、普段意識して発音することがないために、歌唱の際に発音の仕方に迷いが見られたり、音楽の流れが止まってしまうこともある。学生にとってはこれも歌いにくさの要因の一つとなっていると思われる。

⑸　保育士･幼稚園教諭養成校や小学校課程の「音楽」の履修生には様々な音域でも歌えるような試みも行っている。目の前にある楽譜を正しく読譜して歌唱することは勿論であるが、歌いにくさの解決策の一つとして、声の出やすい音域の調性から歌い始め、少しずつ音域を上下に広げていくことも必要であると考える。弾き歌いにおいては調性の理解にも繋がると考え、今後の検討課題の一つでもある。

3－3　中学校音楽（共通教材）の歌唱実践

ここでは声楽の授業他で取り上げた《赤とんぼ》三木露風作詞／山田耕筰作曲について述べる。

中学校の歌唱の共通教材の一つである。「音楽のおくりもの　中学音楽１」（教育出版）（新実ほか：2021, pp.16-17)、「中学生の音楽１」（教育芸術社）（小原ほか：2021b, pp.28-29）に掲載されている。山田耕筰は音楽と言葉の関係性に着目した作曲家の一人である。この曲は前奏４小節、計12小節の短い曲ではあるものの、歌詞の世界観が豊かに広がる歌曲である。四分の三拍子、♩=60「ゆるく、おだやかに」の指示があり、四七抜き音階が使われている。歌い出し部分の２小節間で最低音の変ロの音から二点変ホまで上がっていく。音の上下進行において強弱記号や言葉の抑揚などとの一致も見られ、１小節毎に指示してある強弱記号の多用さも、山田耕筰の日本歌曲への想いの強さが伝わってくる曲の一つである。

3－3－1　発音と歌唱法について

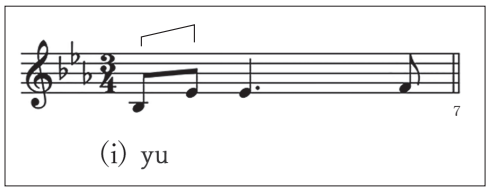
中学校学習指導要領音楽、「指導計画の作成と内容の取扱い」の配慮事項として、「我が国で長く歌われ親しまれている歌曲のうち，我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるもの。」（文部科学省：2017d）とある。学習活動の一つに「言葉の美しい響きを生かしながら，発音に気を付けて歌いましょう。」（小原ほか：2021b, p.28）とあることから、言葉の発音にも留意して歌う必要があることが明らかである。

言葉の発音や発声法に注目した歌唱法の指導例について、次の９点を挙げる。

⑴　「ゆうやけ」の「ゆ」は、半母音を用いてyuの言葉を発することによって、より明確に「ゆ」

の発音が可能となる。また歌い出しの音が低く、その後４度上がる（譜例⑩参照）。ここでは前述の半母音を発音することで息の流れを作りやすく、語頭の歌詞も明瞭に発音することができる。さらに音の跳躍においては息のスピードを保ちつつ、ｕの母音で口の中を開けることで響きが保て、歌いやすさに繋がる。

譜例⑩



⑵　「あかとんぼ」の「ん」の次の言葉がｂのように唇を閉じた状態で発せられるため、この撥音は口を閉じて発音する。

⑶　「こかご」の「ご」は鼻濁音で発音する。

⑷　「つんだは」の「ん」の次の発音がｄのように舌先を歯の裏に付け、口は開けた状態で発せられるため、口を開けて発音する。

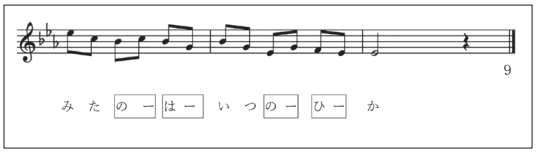
⑸　「じゅうご」の「ご」は鼻濁音ではなく、濁音となる。

⑹　「たえはてた」の「は」はhaであり、ハ行の発音は昭和29年（1954年）12月に出された「ローマ字のつづり方」（内閣告示第一号）によるとha hi hu he hoとある[8]。

⑺　「とまって」の「っ」は促音となり、前の「ま ma」の母音ａを少し引っ張って少し間（■で示す部分）を保ち、「マーアっ■　て」と発音する。

⑻　９小節目以降（譜例⑪参照）は、２拍目と３拍目の１音節に２音が使われており、この音の動きを丁寧に歌いたい（□を付けている部分）。特に下行進行の際には音程への意識が疎かになることが多いため注意したい。

譜例⑪



⑼　歌詞の朗読から言葉の発音や意味、情景、時間の流れなどを確認している。歌唱においては「おわれて」が「背負われて」ではなく「追いかけられて」や、「ねえや」を「姉妹」などという捉え方をしているため、正しい言葉の意味と作者の背景に触れて理解を促している。

３－３－２　学生の歌唱から得た気付きや課題

⑴　歌い出しから２小節間で１オクターブ以上の跳躍（11度）があり、この11度の跳躍の中に声区の変換部分がある。ここは滑らかに歌いたいフレーズではあるが、変換区を伴うために歌いにくい部分である。クレシェンドを用いて息を使う意識を持たせたりフレーズの流れを感じさせながら、歌詞の母音唱や歌詞で歌わせた。また子音の息のスピードや舌や唇の動かし方にも意識を持たせた。声区の変換部分で音が外れる、また高音を発することに困難さを抱いている様子が顕著に見られるため、発声法と発音の効果的な指導を目指したい箇所である。

⑵　「あかとんぼ」「つんだ」など「ん」の撥音の口の開閉、舌の位置などに迷いが見られた。教員が指摘する前に気付いて歌い直す姿も見られたが、他の箇所（リズム、歌詞、音程など）に気を取られてしまうと誤って歌う学生も見受けられ、理解の定着は充分でないと思われる。ただし歌詞を音読する際には正しい発音であるため、それを歌唱に繋げていく意識付けが必要であると思われる。

⑶　促音に関しては、いずれの歌唱の授業においても苦戦している姿が見られた。藍川（2006, pp.25-26）によると、「喋るときには短く発する促音を長く延ばして歌うと日本語らしさがなくなります。（中略）促音を伴う母音に長い音符が当てられていると、つい「なーーって」「そーーっと」と不自然に母音を延ばして歌いがちだが、こういう場合はむしろ「なっ■て」「そっ■と」と休符を入れる感じで短く切った方が楽に歌えるし、自然に聞こえる。」とある。

「と ま ー っ ■て」

「to ma a att■te」

上記の４番の歌詞に出てくる「とまって」の部分では、音に動きがあるため、下線部分「ま」の母音のaで音を歌い延ばしてから、少し休符（間■）を入れるように歌うと歌いやすいと思

われる。さらにその後は音が上行してクレシェンドとなるため、歌唱上では息の流れや、なめらかなフレーズで歌う工夫をしたい部分である。学生の歌唱から促音の歌唱法について、認識できてはいるが、どのように歌えばいいのか分からない、と迷う姿が見られた。そこで促音の前の言葉の母音をきっかけにすること、さらに発音の練習では「とまあーあって」の下線部分を強調させて跳ねるように、なめらかに進む部分と跳ね上がる部分を手で動かして比較しながら歌唱するなどを試みている。また「あっ」の部分で息を少し多めに出して強調して歌ってみるなど、息の使い方の工夫を伝えることで気付きを得ることができた姿も見られた。撥音と同様に間違いに気付いて歌い直す学生の様子も見られたが、歌い分けの違いが分からない、自分がどちらで歌っているのか分からない、という学生もおり、学生の理解に繋がる指導法は今後の課題である。

⑷　この曲の歌詞に注目すると、「絶えはてた」とあり、「絶えた」ではなく「絶えはててしまった」ということが歌詞から伺え、この言葉の真意が伝わる演奏に繋げたい。この際の「は」の発音はhaであり、ｈの子音を明瞭にすることで、「はてた」という言葉がより鮮明になる。ハ行の発音はｈ音だけではなく唇や舌の位置によっても異なるが、息を使う発音の一つである。ただ普段の会話において息や唇、舌の動きの意識を持たずに発音するため、歌唱において不明瞭になってしまうことがある。子どもの歌にもよく「はる」「はな」などが出てくるが、語頭の発音でハ行が出てくる場合は特に発音において意識を持つ必要があると思われる。学生の練習では、ハ行を発音する際に発声練習を取り入れて、息の速度や流れなどの意識を持たせるようにしてはいるものの、歌唱へのスムーズな応用においては課題である。

⑸　歌詞の抑揚と旋律の流れ、強弱やフレーズの一致などには、歌詞の発音や発声法、さらには表現の工夫など、歌唱への繋がりにも注目して指導している部分である。

⑹　３-３-１⑻で挙げた２音で１音節を歌う部分であるが、例えば《浜辺の歌》（林古渓作詞／成田為三作曲）でも同様に十六分音符の上下行進行が用いられている。ピアノ伴奏と一緒に歌う際に、特に下行進行で音程が曖昧になり、歌いにくさが生じる箇所でもあるために、丁寧にゆっくりと歌う練習を勧めている。

３－４　高校の教科書掲載曲の歌唱実践

ここでは３-３と同様に声楽の授業他で取り上げた《椰子の実》島崎藤村作詞／大中寅二作曲（新実：2022, p.17参照）について述べる。

曲については、民俗学者の柳田国男が島崎藤村に伝えたといわれるエピソードは周知の通りである。３番の歌詞に出てくる藤村ならではの詩人としての見方や感性によって、歌い継がれる曲となったとも言われている。柳田が残した興味深いエピソードには、沖縄や奄美群島にはニライカナイと呼ばれる信仰があり、漂着した椰子の実を藤村は詩に、柳田は民俗学者として、ニライカナイのユートピア願望を込めているということは大変興味深く感じる[10]。

３－４－１　発音と歌唱法について

島崎藤村の詩から、韻律が基本的に五七調で統一感がある。二連がまとまってそれぞれ一番から三番となり、第七連目は一つのフレーズを持っている。この曲も《赤とんぼ》同様に、１小節毎に細かな強弱記号が付いている。歌は８小節と短いものの、音域は１オクターブの間で跳躍が多用されており、そこに歌いにくさが生じる。しかし発声法や発音の工夫を講じることで、豊かな詩情の伝わる演奏を目指したい。

なお言葉の発音や発声法に注目した歌唱法の指導例について、次の８点を挙げる。

⑴　１番の歌詞では出だしの「なも」の４度、「とおき」の部分はさらに５度跳躍して上行していく。その後１オクターブ上の音に上がるため、息の流れを保って最高音を目指して歌いたい。

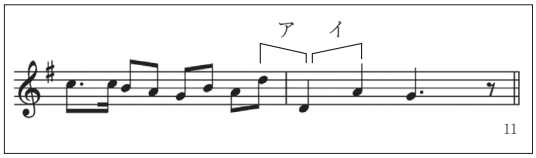
⑵　「ながれよる」「かげ」「なぎさ」などは鼻濁音を用いる。

⑶　「ひとつ」の「ひ」はクレシェンドの頂点として明瞭に発音することを目指す。次の「ふるさと」の「ふ」は高音から始まるため、息を使って歌うことが求められる。ここでの母音uは高音で

あるため口の空間を保ち響きを持たせる必要がある。

⑷ 「なみにいくつき」の部分では、前述の韻律に着目すると、「に」と「い」の間は開けずに歌いたい。譜例⑫のアとイの部分では音の跳躍が見られるため、身体の準備と息の流れ、響きの確保などが必要となる。

譜例⑫



⑸ 「おいやしげれる、かげをやなせる」部分は対句となっており、「や」は疑問の助詞となる。したがって「かげを／やなせる」と区切らず、「かげをや／なせる」と捉えることに注意したい。「や」の音がいずれも高いために半母音を用いて柔らかく発音し、次の「しげれる」や「なせる」の下線部の発音を明瞭に歌いたい。

⑹ 「りゅうり」の「りゅ」はryuであり、舌を使う意識を持って明瞭な発音を目指したい。続けて「うれい」の「う」の発音が来るが、次の「うみのひの」の「う」の発音と同様に口の中を開けた深いuの発音になる。

⑺ 「しおじお」では、藍川（2006, p.27）によると「『椰子の実』の楽譜では、「汐々」の歌詞がいつの間にか「しおじを」と誤植されてしまいました。「しおじを」を歴史的仮名遣いで書くと「しほぢを」なので、原詩の「しほじほ」とは意味も表記も異なります。」とある。「じｊ」と「ぢｄ」の発音について区別して発音を行う必要があるが、ｊの発音が一般的であると認識する所以は、ヘボン式に慣れていることに因るものであると考えられる。

⑻ 「かえらん」の語尾の「ん」には注意したい。ここでは助動詞の「かえらむ」であるため、mの発音となる。藍川（1998, p.137）によると「Nで発音すると否定、Mなら推量となる。現代仮名遣いでは「む」と「ぬ」の表記が「ん」に統一されるため、意味の異なる言葉が同じ表記になってしまったのである。」とあり、注意したい。

3－4－2　学生の歌唱から得た気付きや課題

この曲を鑑賞すると、歌詞の内容から歌ってみたいという積極的な気持ちに駆られるが、実際の歌唱では音の跳躍やブレスコントロール、発音などにおいて難しさを感じる部分があり、学生の歌唱だけではなく、筆者自身の歌唱からも多くの気付きや課題を得ることができた。

⑴ 歌詞の持つリズムがあることから、この韻律を丁寧に歌唱に活かす必要性に気付くことができた。

⑵ 歌詞の解釈により、柳田国男が伝えたとされる内容、島崎藤村の感受性、さらに大中寅二の日本語の抑揚に沿った旋律と詩の内容を豊かに表した旋律、第七連目に向けたメッセージを考え、深めていくことができた。

⑶ 「うみのひの」の「う」の発音はこの曲の最高音であり、発声法（口の開け方など）の難しさに課題が残った。

⑷ 「みをとりて」「むねにあつれば」「たぎりおつ」などの動作を、イメージを持つだけではなく体現化することで、その様子が歌唱で表現することができた。

⑸ 一つ一つの言葉の発音に留意し、語頭の発音を明瞭にして言葉を伝えることに注目した。日本語は抑揚を持つため、今後第一音節目だけではなく、第二音節目にも着目してどのように変化しているのか、さらに言葉と旋律との繋がりに対して深化させた気付きを持ちたい。さらに外国歌曲との比較歌唱を行うなどから発音や発声法、楽曲分析や表現の工夫などにおいて学生の気付きを深めることが課題である。

4．まとめと今後の課題

本研究から分析できたことは、教員や指導者として、子どもたちの前に立つ学生の指導に際し、幅広い課程を履修する学生の声楽の指導の中で、歌いにくさへの改善をいかに図るべきか等、学生の歌唱法について効果的な指導や歌唱法の醸成に関する課題を再確認できたことである。「口の中を開けて」という指導内容であっても、なぜそのような指示が必要なのか、どのように開けたらいいのか、学生自身が声楽実践を通して習得した知識や技能をどのように子どもたちの前で実践して

伝えていくのかという多様な視点から考察し研究していく必要がある。勿論、個々にイメージや捉え方が異なるにしても、発声法のメカニズムを知り「口の中を開ける」ためにどのようにしたらいいのか、教育現場での経験を活かして歌唱法を醸成させていくための効果的な指導法について様々な気付きや課題を持って、筆者自身も教育研究に活かしていきたいと考える。

本稿では発声法や言葉の発音に着目して、学生の歌いにくさの要因も取り上げ、具体的な解決策を探りながら、教員を目指す学生自身が日本語の持つ美しさを感じ、範唱や歌唱指導において児童生徒の歌唱の指導に活かしていく歌唱法の醸成について考察し、述べてきた。中学校の音楽の授業時間は年間で第１学年45時間、第２・３学年35時間（文部科学省：2018, p.125）であり、歌唱の時間は限られている。その中で子どもたちが楽しいと思える歌唱指導を実践していくには、保育士や教員養成の様々な課程において、教育者を目指す学生自身が知識を深め、歌唱実践に応用させていく力を育むための歌唱法の醸成を行うことが求められていると考える。

今回は「教員を目指す学生の効果的な歌唱法の醸成に向けて、歌唱における発声法や言葉の発音から探る　その１」として、様々な課程で取り上げていた曲を例に挙げて考察を行ってきた。今後も歌唱の指導法について、引き続き学生の歌唱法の醸成に向けた指導の成果と課題について研究を行っていきたいと考える。また沖縄という地域性をも頼りに、地域独特の発音や発声法についても、沖縄の伝統文化や芸能を継承していく学生の指導に当たる一人として演奏や研究を学生の歌唱指導に活かしていきたい。

参考文献・引用文献

・文部科学省「幼稚園教育要領　2017年告示」(2017)a
・厚生労働省「保育所保育指針　2017年告示」(2017)
・文部科学省「幼稚園教育要領　解説」(2017)b
・文部科学省「小学校学習指導要領　音楽　2017年告示」(2017)c
・文部科学省「中学校学習指導要領　2017年」(2017)d
・文部科学省「中学校学習指導要領　解説　音楽編」(2018)
・小原光一ほか「小学生のおんがく１」教育芸術社（2021)a
・小原光一ほか「小学生のおんがく１　指導書」教育芸術社（2020)
・新実徳英ほか「中学音楽１　音楽のおくりもの」教育出版（2021)
・小原光一ほか「中学生の音楽１」教育芸術社（2021)b
・新実徳英監修「音楽Ⅰ　Tutti+」教育出版(2022)
・初等科音楽教育研究会編「改訂版最新初等科音楽教育法」音楽之友社（2021)
・斎藤忠彦・菅裕編著「新版　音楽科教育法」教育芸術社（2021)
・小林美実編「こどものうた200」チャイルド社（2019)
・米山文明「声と日本人」平凡社（2007)
・斉田晴仁「声の科学」音楽之友社（2016)
・大賀寛「美しい日本語を歌う」河合楽器製作所・出版部（2003)
・藍川由美「これでいいのかにっぽんのうた」文藝春秋（1998)
・藍川由美「日本の唱歌」音楽之友社（2014)
・藍川由美「「日本のうた」歌唱法」カメラ―タ・トウキョウCMCD-99029（2006)
・藍川由美「「日本のうた」歌唱法２」カメラ―タ・トウキョウCMCD-99053（2008)
・畑中良輔監修「日本名曲百選　詩の分析と解釈Ⅰ」音楽之友社（2019)
・畑中良輔監修「日本名曲百選　詩の分析と解釈Ⅱ」音楽之友社（2019)
・読売新聞文化部「唱歌・童謡ものがたり」岩波書店（2014)
・栗栖由美子「小学校教員に求められる発声に関する技能」大分大学教育学部研究紀要第41巻第１号（2019)
・高奈奈「保育士養成課程における歌唱表現の指導　－学生の音声データから見えてきたこと－」神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報（2022)
・薮崎伸一郎「保育者養成校における歌唱指導に

関する研究　－「めだかの学校」に着目して－」十文字学園大学紀要第49集（2019）
・岩瀬順一「日本語のローマ字書きについて」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo_kadai/iinkai_53/pdf/93761401_02.pdf（2022年10月10日閲覧）
・「ローマ字、ヘボン式主流」日本経済新聞（2022年10月１日掲載）

注

[1] 文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」令和２年12月　https://www.mext.go.jp/content/20201210-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf　（2022年10月10日閲覧）

[2] 筆者自身が歌唱して作成した７分程度の発声練習動画を限定公開で共有した（授業終了時に非公開としている）。

[3] 小林美実編「こどものうた200」チャイルド社（2019）p.116より抜粋。

[4] 同上。

[5] 文化庁ホームページ「令和３年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/93767401_01.pdf（2022年10月1日閲覧）

[6] 小原光一ほか「小学生のおんがく１」教育芸術社（2021）、pp.28-29より抜粋。

[7] 小原光一ほか「中学生の音楽1」教育芸術社（2021）p.28より抜粋。

[8] 文化庁「７ローマ字つづり方の問題　［別紙］,〔付記〕〔別紙〕https://www.buka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/02/bukai07/03.html（2022年10月10日閲覧）

[9] 小原光一ほか「中学生の音楽１」教育芸術社（2021）p.28より抜粋。

[10] 読売新聞文化部「唱歌・童謡ものがたり」岩波書店（2014）参照。

[11] 新実徳英監修「音楽Ⅰ　Tutti+」教育出版（2022）p.17より抜粋。